

4 路地

私が

耳の人と出会ったのは

ひっそりとした

路地奥の喫茶店だった

休日の昼下がり

店へ行くと

たいてい

その人はいた

いつも

白いうつわで

珈琲をすすっていた

二、三度顔を合わすうちに

話をするようになった

印象に残った言葉を記す

木曜日の

珈琲はおいしい

路地奥では

十九世紀が続いている

世界が一つになって

よいことは一つもない

私が詩を書いていることを知ると
その人は

だから

ここに避難しているんだね と

指摘した

そして

はっと何かを思い出したように

ポケットから

どんぐりを取り出し

お守りになるよ と

手渡してくれた